

印西大師 番外 草深・妙光院（如意輪寺）

1 名称 (No.270)〔資料館：妙光院〕〔行程表：妙光院〕

2 場所 印西市草深721 如意輪寺

生大師(大生寺)から道程約330m

GPS座標 35.79268399827786, 140.1607780929082

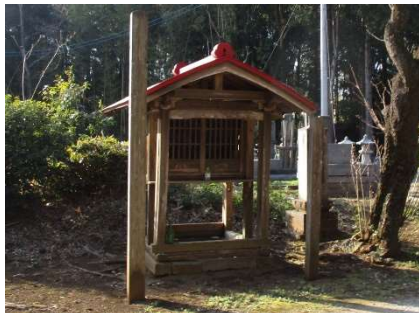
3 由緒 天台宗 稻荷山 妙光院 如意輪寺

惣深新田字寺台にあり 天台宗泉倉寺末なり 阿弥陀如来を本尊とす 由緒不詳 檀徒488人(印旛郡誌)

4 御堂 大師堂の中に丸彫りの御大師様が1体 (明治6年)あり。ほかに観音様などあり。

5 境内 大師堂のほか、本堂や石造物がある。西隣に草深稲荷神社がある。

6 写真 (2023.03撮影)



大師堂



御大師様



御大師様など



本堂



右の石像と手前の観音像？



西隣の稲荷神社

7 情報

(1) 如意輪寺（によいりんじ）

天台宗の公式ホームページには「如意輪寺（によいりんじ）印西市草深721」とあり、千葉県宗教学人名簿も「如意輪寺 印西市草深721番地」となってる。

(2) 妙光院

「下総国印旛郡和泉村泉倉寺門徒 高拾三石九斗貳合 天台宗稲荷山妙光院 本尊阿弥陀如来 正徳三癸巳年開基ニ御座候」（「印西町史資料集近世編4」P.635）※正徳3年＝1508年

(3) 稲荷山 如意輪寺 妙光院

寺台にある妙光院は稲荷神社の別当寺であった。新田開発の時、香取兵左衛門（三村組）と湯浅金兵衛（千足組）の二組の者がその請地内に「稲荷面」を設け、村成就の暁に稲荷を勧請して

鎮守にしようとした。延宝二年（1674年）二月の初午に、千葉郡桑橋村の安養院（真言宗）の僧を頼んで稲荷明神（祭神倉稲魂命（うかのみたまのみこと））を勧請する。その後、安養院から尊宥（そんゆう）という僧を招いて草庵を結んで住居させ、尊宥庵を末々は稲荷神社の別当寺にしようとした。元禄年間（元禄五年以降）尊宥庵を放光院と改め、和泉村の泉倉寺の門末と決め、天台宗に改宗する。正徳三年（1713年）泉倉寺門末の浦部村の妙光院という潰れ寺の寺号を金拾両で買いとり、幕府の許可を得て妙光院とした。妙光院の創基である。

ここは古くから「太宇加賀峠」（稲荷（とうか）の峠の意）といったが、寺が建てられてから「寺台」と呼ばれるようになった。現在の建物は昭和五年の建築で、本尊は阿弥陀如来（以下略）（印西町文化研究会「郷土の文化財」昭和56年7月発行）

（4）深川に引き寺された嶺雲院の謎～請方から唯心へ寄進状

惣深新田検地のあった年の2年後、延宝6（1678）年2月18日に清重郎（加藤）・源兵衛（清田）・金蔵（金兵衛＝湯浅）・文右衛門（小清水）・長左衛門（湯浅）・平左衛門（香取）ら請人代表らは、唯心和尚に新田村の檀家寺になっていただけるようお願いする寄進状「相渡申証文之事」を提出しています。請方から堂修復造営の科(かて)に林1か所、柏木山の内に2町歩が寄進されました。

惣深新田には、まだ寺院がなかったため、「村民の檀家寺になって欲しい、そのために寺の田畑は村が責任を持って耕作する」ことを願い出たものでした。各地から百姓を呼び寄せ定着させるために村には寺が必要だったのでしょう。「将来、境内で市を立てたい」ともいっています。寺院の建立も示唆しているところから、この時点では寺院の建立はまだだったようです。しかし、「なぜか」その願いは聞き入れられなかったといえます。そのため、惣深新田は後に稲荷神社と天台宗の妙光院を建立しています。（「いんざい再発見」より）

（5）妙光院は第79番札所だった？

明治39年の梶原納経帳によると第79番札所は草深 明光院（本尊 阿弥陀如来）とある。明光院（みょうこういん）とは、御本尊も同じなので妙光院のことと思われる。とすると明治39年頃の第79番札所は、天王前でも丸山観音大師堂でもなく、妙光院だったということになる。

（6）草深稲荷神社

草深の鎮守である稲荷神社は、寛政8年(1796)、当時の名主香取平左衛門信賢が、請方や村役人らとともに、折から上京する船尾村宗像神社の神官香取栄金に頼んで、京都の吉田殿から「正一位の神号」を受けたことに由来するとされています。

本殿は、間口5尺(1.5m)、奥行5尺ほどの大きさで、拝殿は昭和47年に改築されました。境内には、天満社をはじめ、天保3年(1832)に清田源兵衛経信によって建てられた開墾の碑や日露戦役従軍記念碑などがあり、例祭日は10月19日です。この神社には、多数の絵馬が奉納されていますが、なかでも特徴的なのが、文政7年(1824)の石川文居筆の1点と、嘉永5年(1852)、安政6年(1859)の博山筆の2点の絵馬です。図柄はいずれも「武者」で、大きいものは、縦86cm、横196cmの見応えのあるものです。これらは香取平左衛門利彰(百合丸)らの名主をはじめ、数十人の村人によって奉納されており、敬神や崇祖の念が込められているのがうかがえます。このほか、大正の初期までは、拝殿の内の竜の彫物を濡（みお）につけて行う「雨乞い」、8月下旬の台風をさける祈りである「荒除け」や9月中旬の「礼ごもり」などの神事が行われていました。（印西名所図会）